平成 23 年度　大学職員情報化研究講習会　～応用コース～

第 6 分科会　駅伝 B チーム　報告書

主体的にコミュニティ形成が行える ICT の取り組み
～学生が“楽しい”と思える大学を目指して～

１．課題の共有

（１） 全体会の振り返り

全体会で実施した、講義、情勢研究を踏まえて、チームメンバー内で意見と感想の共有を行った。

メンバー内で特に興味深かった事項として、以下の点が挙げられた。

a) 情報の質（Data/Information/Intelligence）の違い。

b) 受け手を意識した情報発信。

（２） 課題の共有

討議テーマを決めるにあたり、各メンバーの大学で抱える問題を抽出し、課題の整理を行い、以下の課題が挙げられた。

a) 少子化などに伴う、大学全入時代の到来により、目的が不明確なまま大学に入学する学生が増加している。

b) 大学生活がつまらないと感じている学生や大学内で孤立する学生が増加している。

c) 入学時の大学への期待感が希薄化し、充実感が得られない学生が増加している。

d) 就業観・職業観の不足している学生が増加している。

e) 情報の繋がり、先輩後輩などの繋がりが不足している。

f) 大学に対する帰属意識が低下している。

２．理想の姿（ビジョン）の形成と共有

共有した課題を踏まえ、その理想像の形成を行った。

課題から見出された理想像のキーワードとして以下が挙げられた。

a) 広い意味での大学生活での”楽しさ”の提供

b) 学生主体・学生主導

c) 大学へ来なくなってしまう（中退の可能性のある）学生へのフォロー

d) 入学予定時点を含めた入学前のフォロー

e) キャリア形成支援におけるフォロー

f) 教職員間や学生間における情報（ノウハウ）の活用

上記のキーワードの実現に向けた取り組みテーマとして、以下の通り定めた。

<u>主体的にコミュニティ形成が行える ICT の取り組み</u>
<u>～学生が“楽しい”と思える大学を目指して～</u>

３．目的の明確化

ニーズカードを目的別に分類し、「何のために行うか」「なぜ行うのか」という観点から、グループ分けや具体的な関連性の整理を行った。また、それぞれの目的について具体的に文章化することで、理想像に結びつく目的を明確化した。

（目的関連図は発表資料を参照）

４．実現案の検討

目的関連図からポイントを定めて具体的な実現案を検討した。

実現案については、学生生活における時系列別のシーンに分類し、それぞれでの効果的な実現案を具体的に挙げていった。

（実現案の内容は発表資料を参照）

また、実現案が具体化した段階で、以下の点についても検討を行った。

・コミュニケーションツールの限界
・教職員が担うべき役割と組織的な運用体制
・制約事項
・目標の設定と評価方法

５．発表
上記検討を踏まえて作成した資料に基づき、発表を行った。

６．相互評価
発表に対する別チームからの評価として、以下の感想・意見があった。
a）入学前から卒業後までという長期的に使えるという点は評価できる。
b）OB/OG とのコンタクトを支援するという点も評価できる。
c）大学への帰属意識を高めるという観点も含め、広く一般に普及している facebook などとの差別化を図る必要があると考えられる。
d）face to face でのコミュニケーションも重視するという点で、教職員がどのように関わっていくのか更に検討されると良い。

７．評価を受けての改善案
a）既存の mixi や facebook が一般的に広く普及していることみても、利用者に対してはある程度の付加価値を与えることは必要であると考える。しかし、大学が運営しているＳＮＳという点でセキュリティ面、利用者のモラル、情報の質といった部分は一般それとは一線を画すものと思われ、それだけでも利用にとってのメリットは大きい。また、各利用者へは他のＳＮＳでは得られない、有益かつ重要な情報（入学、履修、行事に関する情報など）を発信することや、楽しいと感じさせるツールをもたせることで優位性を高めていきたい。
b）教職員の Face to Face での関わりを重視するという点では「Q&A メンター（相談員）機能」を提案する。既に検討していた Q&A 機能に加えて、特定のメンター（相談員）に対して質問や相談ができるようなシステムである。メンターは年齢・性別・教職が異なるメンバーで構成され、様々なタイプの学生が相談しやすい環境にする。合わせてメンターとの懇談会を定期的に実施することでメンターと学生、相談している学生同士が直接コミュニケーションをもつ機会を設ける。「顔の見える教職員」のイメージを学生が持つことによって、相談しやすい環境を作り、大学に対する安心感、ひいては帰属意識を醸成していきたいと考える。

８．まとめ
少子高齢化、大学のユニバーサル化が進む中で、【学内ＳＮＳ】を用いて、入学予定者、在学生、卒業生間のコミュニティ形成を支援し、基礎学低下、職業観の低下、退学者問題など、現在大学を取り巻く諸問題の解決を目指した。
議論の中では、”楽しさ”という点を意識して検討したことから、SNS の性質についても『学生が自ら率先して』『手軽で自由』『気軽に利用できる』という観点で様々なアイデアが出されたことが良かった。反面、積極性の低い学生や興味の乏しい学生などをどのように巻き込むことが出来るか、運営面での管理方法、費用対効果などについては更なる議論の余地があったのでないかと考える。
発表にもあったように、SNS はあくまでコミュニティ形成を支援するツールであり、教職員の関わりとどのようにバランスを保っていくのか、今後も検討する必要があると感じた。

（メンバー）

愛知学院大学	鈴木　宏伸	西南学院大学	中山　英人
中部大学	杉本　千秋（報告書作成）	東海大学	木村　由美子
明治大学	村上　雅一（発表）	立教大学	小川　龍秀（進行）

以上